



のと海洋ふれあいセンターだより

能登の海中林

NEWS LETTER OF NOTO MARINE CENTER No. 30. Mar. 2009



すずおのくとえんでんむら 珠洲市の奥能登塩田村で①作業手順の説明を受ける; ②板箱の中に集めた砂を詰め込む;
くおけ まどいわ ③海水を汲み桶で塩田まで運ぶ; ④曾々木の窓岩と能登の里海エクスカーションの参加者
(2-4ページ参照)

<目次>

能登エコ・スタジアム2008 能登の里海エクスカーションの実施… 坂井 恵一 …	2
トピックス(あら鍋の“あら”はクエ・ヤドカリ学級) ……………	5
サケが自然繁殖している奥能登の川…………… 横井 将大 …	6
海への感謝 in 能登 ― 海から地球温暖化を探る・そして海をクリーンに ― … 福島 広行 …	7
センター誌抄と観察路だより……………	8

平成 21 年 3 月

能登エコ・スタジアム 2008 能登の里山里海エクスカーションの実施

——生物多様性条約第 10 回締約国会議（COP10）に向けての取り組み——

坂井 恵一

石川県は先祖から受け継いできた里山里海とそれらに調和した人々の暮らし、そしてこれらを保全するために、金沢大学、国連大学高等研究所いしかわ・かなざわオペレーティング・ユニット、そして県内各市町と連携しながら、里山里海を守る県民運動を展開することになっています。

そこで 2008（平成 20）年は里山里海国際交流フォーラムを開催し、その主体事業として「能登エコ・スタジアム 2008」を実施しました。当センターはこの中の「能登エクスカーション」に参加・協力することになり、「能登の里山里海エクスカーション」を受け持ちました。このエクスカーションは海岸と浅い海、すなわち里海の生物多様性と持続可能な利用をテーマとすることにした。行程と訪問の目的を下表に示します。1泊2日の日程で参加費は 9,300 円、定員は 30 名で募集が行われました。参加者には1泊2食の宿泊費と両日の昼食、参加保険料を負担していただき、主催事務局は JR 金沢駅から翌日の「総括フォーラム」までの移動用のバスと各施設の利用料・体験学習費を提供することになりました。参加者とは別に、のとスノーケリング研究会「海もぐら」の川原 英さんに同行してもらい、写真の撮影等をお願いしました。最終的な参加者は 22 名でした。

最初は本州の日本海沿岸で唯一、環境省により「シギ・チドリ類の重要渡来地」に指定されているかほく市の高松海岸に立ち寄りました。波打ち際には引き波で砂の表面に姿を現したナ

ミノリソコエビが必死で砂中に潜ろうとする姿が観察できます。本誌第 28 号でも紹介しましたように、シギ・チドリ類はシベリアからオーストラリアまで、地球のおよそ 3 分の 2 を移動する渡り鳥で、ナミノリソコエビは飛来しているシギ・チドリ類の大切なエサになっています。もしかしたら、渡りに必要な栄養を補給するために、わざわざこの高松海岸に飛来しているのかもしれませんが。当センターは 2007（平成 19）年以降、春と秋のシギ・チドリ類の渡りの季節にナミノリソコエビの生息量を調べています。

この日は当センターの福島専門員がモニタリング調査を行うことができたので、参加者に調査の方法やナミノリソコエビの現物を見ていただくことができました。僅か一握り程の砂の中に沢山のナミノリソコエビが潜んでいることを目の当たりにでき、歓喜の声さえ聞こえました。高松海岸は身近な海岸ですが、野生生物の営みと砂浜海岸の生物多様性を実感できる好適地です。

次に訪れたのは穴水町中居の能登中居鋳物館です。中居は平安時代の終わり頃から昭和初期までの約 770 年間、全国屈指の鋳物（鉄器）の生産地で、特に江戸時代には加賀藩の保護・統括の下、製塩用の平釜の生産で活気を呈していました。この地にこの特殊産業が発達した要因は、①原料の磁鉄鉱が近辺で産出したこと、②沢山の薪を入手しやすかったこと、③重い鉄製品でも北前船を使って輸送できたこと、などに恵まれたた

時間	訪問地と主な目的	解説者
14 日（日曜日）集合：JR 金沢駅；午前 9 時出発		
9 時 30 分	かほく市高松海岸【シギ・チドリ類の飛来地とナミノリソコエビの観察】	福島広行氏
11 時 00 分	穴水町の能登中居鋳物館【揚浜式製塩に使われた鋳物（鉄鍋）の見学】	久下奈利子氏
13 時 30 分	輪島市千枚田【名舟集落の里山里海の再生に向けた取り組み】	小引松男氏
14 時 00 分	珠洲市の奥能登塩田村【能登に伝わる揚浜式製塩の体験】	
17 時 00 分	曾々木民宿横岩屋で食談義【能登の里山里海の暮らし、文化・歴史他】	藤平朝雄氏
15 日（月曜日）宿舎を 8 時 20 分出発		
9 時 00 分	真脇遺跡縄文館【長期集落の形成要因と鯨類（イルカ）の利用】	新出直典氏
10 時 00 分	のと海洋ふれあいセンター【藻塩と土器製塩の体験、その解説】	加藤三千雄氏
12 時 00 分	金沢大学里山里海自然学校【地元食材を使った「へんざえもん」で昼食】	
13 時 30 分	珠洲市内【総括フォーラムに合流】	

めようです。当然、この中居の歴代の人々の努力も忘れてはなりません。

輪島市内で昼食を取った後、棚田の代表地「千枚田」を眺めながら、名舟里山里海プロジェクトリーダーの小引松男氏に、この地（名舟町）の歴史と里山里海の再生に向けた取り組み、現状と問題点等を解説していただきました。その後、珠洲市仁江海岸にある「奥能登塩田村」に向いました。

能登では昭和30年代まで、各地の海岸部で揚浜式製塩が行われていました。製塩は瀬戸内海一帯や三河地方で特に盛んに行われていましたが、これらは全て入浜式製塩でした。潮の干満差を利用し、満ち潮のときに海水を塩田に導き入れ、その後はため池状にして水分を自然蒸発させ、濃度の高い海水（漉水）を得る方法です。一方、干満差の小さい能登では、桶で汲んだ海水を担いで運び、砂を敷き広げた塩田にまき、太陽と風の力で水分を蒸発乾燥させます。その後砂を集め、結晶となっている塩を海水で溶かして漉水を得ます。いずれの方法も最後は漉水を火で煮詰めて塩をつくります。能登で製塩が盛んだったのは、①平野が少なく、大きな川もなかったのが好都合であった、②薪が入手しやすかった、そして、③中居で平釜が造られていた、ことなどが上げられます。

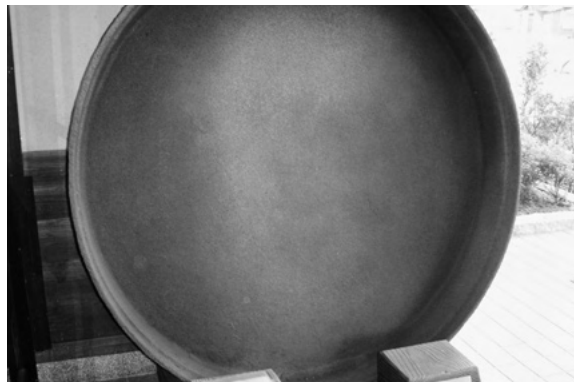
ここを訪れたのは製塩体験が目的です。到着早速、作業手順の説明を受けてから全員裸足で塩田に入りました。そして、早朝から海水を撒いて天日で乾燥させた砂集めから始め、その砂は板を組み合わせて作った箱の中に詰め込みました。砂集めが終わる頃には有志が海水を汲みに海岸に向かい、約30リットルは入る桶2個を担いで塩田に戻ってきました。その海水を板箱の砂の上から注ぐと、塩分濃度約20%の漉水が箱の下の樋から出てきました。最後に明日の作業準備のため、板箱の中の砂を塩田に均等に敷き広げて作業終了となりました。約2時間の体験でしたが、参加者には結構きつかったようです。この後、漉水は煮詰められるのですが、この新しい施設ではステンレス製の大鍋が使われていました。もちろん以前は穴水中居の鋳物鍋が使われていたとのことでした。

その日は曾々木の民宿横岩屋さんに泊りました。史跡名勝の曾々木海岸の窓岩が直ぐ目の前です。その日は西の空を茜色に染めて沈む夕日が鑑賞できました。

夕食は能登半島広域観光協会相談役の藤平朝雄氏を講師に迎え、食談義を行いました。藤平さんから能登の①塩造り、②祭り、③農業と炭焼き、酒造り（杜氏）、④輪島塗、そして⑤舳倉島と海士の漁業等など、能登における人の暮らし、文化・歴史について語っていただきました。宿泊した曾々木は揚浜製塩が最も盛んに行われていた場所の一つで、夏の約100日間、炎天下で作



福島専門員の解説を聞き入る参加者



中居鋳物館の正面玄関にある製塩用の平釜



藤平朝雄氏（上左）を囲んでの食談義の一場面

業が続けられていました。塩は貴重な食料であり、野菜や魚介類の貯蔵原料でした。また、薪の手配は里山の良好な管理に結びつきます。能登の塩造りと鋳物産業は良好な里山の環境と生物多様性を維持していたのです。つい最近まで、能登では里山と里海が一体となって適切に管理され、活用されていたことを藤平さんから教えていただきました。

次の日、能登町真脇にある真脇遺跡縄文館に向かいました。真脇遺跡でも一時的に集落が途絶えた時代が数回あったようですが、概ね約4,000年間、縄文人が暮らしていた遺跡です。しかも、大量のイルカ類の骨が出土しました。ここでは山と海の幸が縄文人の狩猟生活を支えていたのです。

次ぎにのと海洋ふれあい当センターを訪れ、土器製塩の体験を行いました。素焼きの土器に濃い海水を入れ、薪を使って煮詰めるのです。当センターの敷地周辺で行われていた土器製塩は縄文時代から平安終期頃まで続いていたようですが、鋳物の鍋が現れると途端に姿を消したようです。また、海水を得るのに海藻が用いられたこともあったらしく、この方法で造った塩は藻塩と呼ばれています。塩をつくるのにも土器を焼くのもの、やはり薪が必要です。海に面し、直ぐ後背に山と森が迫っている当センター周辺は、土器製塩に最適な場所の一つであったことがうかがい知れます。なお、藻塩と土器製塩に関する解説は能登町宇出津の酒垂神社宮司である加藤三千雄氏にお願いしました。

最後は珠洲市三崎町にある金沢大学の里山里海自然学校を訪れ、施設と展示物の見学をしました。そして、周辺のご婦人方が組織運営する「へんざえもん」で昼食をいただきました。赤い御膳に盛り付けられたご飯と味噌汁、お煮しめと山菜の漬物は、素朴ですが“もてなしの心”を強く感じることができました。そしてその後、最終的目標である総括フォーラムに臨みました。

能登における公設の博物館やその類似施設は地域の自然や文化・歴史を展示し、体験学習を提供しています。今回は訪問できませんでしたが、輪島市の北前船資料館や漆芸美術館、珠洲市の珠

洲焼資料館もあります。また、志賀町の増穂ヶ浦は小さな貝類が豊富に打ち上がり、多くの訪問者が海の生物多様性を実感できる海岸です。各施設や海岸は直接関係がないようにも感じられますが、里山里海をテーマとすると状況は変わります。お互いが連携を深めれば、大きな可能性が生まれるはずだと感じました。

なお、「能登エコ・スタジアム 2008」の詳細については報告書が発行されていますので、事務局(076-264-5270)にお問い合わせください。

(普及課長)



真脇遺跡縄文館で展示解説を聞き入る参加者



のと海洋ふれあいセンターにおける土器製塩



地元食材で作られた「へんざえもん」の昼食

トピックス

あら鍋の“あら”はクエ

福島 広行

テレビ番組などで超高級鍋^{なべ}として紹介されるあら鍋の“あら”は、体長80cmにもなるスズキ目ハタ科のクエのことです。

クエは、メスからオスへと性転換^{せいてんかん}する魚で、千葉県以南の太平洋沿岸では秋頃にタイドプールなどで幼魚が見つかるそうです。ここ能登^{のの}では、体長60cm位までのものが希^{まれ}に漁獲されるものの、幼魚の採集や観察の記録はありませんでした。このため、能登周辺では性転換するまでには成長出来ず、繁殖^{はんしよく}も行えないことから幼魚も見つからないのだと考えられていました。

10月17日、磯の観察路を巡回^{じゅんかい}していた際、タイドプールコースの奥まったところで全長5cmほどの見慣れない魚を1尾見つけました。その後、何度となく手ダモによる採集を試みては失敗に終わってしまいましたが、意を決した10月30日、ウェットスーツを身にまとい、大きな角網^{かくあみ}の

二刀流^{にとりゅう}で悪戦苦闘^{あくせんくとう}すること約30分、ようやく捕らえた獲物はこのクエの幼魚でした。今回採集した幼魚は、卵または浮遊稚魚^{ふゆうちりう}の段階で南の海から海流によって運ばれ、偶然磯の観察路に定着したものと考えています。しかし、もしかしたら能登にもオスの巨魚^{きょぎょ}がいて、繁殖が行われているのかも知れません。

(普及課専門員)



採集時と飼育後（右下）の体色の違いに注目

ヤドカリ学級～地域の達人にまなぶ～

東出 幸真

のと海洋ふれあいセンターでは、身近な海の自然と生きものや人間と海とのかかわりなどについて理解と関心を深めていただきたく、普及啓発の一つとして、ヤドカリ学級を開催しています。

本年度は「ところてんづくり！」や「ヤドカリのひっこし！」といったテーマで、主にセンター職員が観察や実験などを行ってきましたが、近隣



イカめし作りを手ほどきする橋本さん（左手前）

地域の方々^{きやうどう}と協働^{きやうどう}で開催する取り組みをはじめることになりました。その手始めとして1月に「イカ」をテーマに行いました。

当センターに隣接する能登町小木港は中型イカ釣り船の母港として有名で、漁獲されたスルメイカは町の特産品のひとつにもなっています。体の特徴や漁獲方法の変遷^{へんせん}などの解説をセンター職員が行いました。その後、「イカめし」作りを小木校下婦人会会長の橋本洋子氏^{はしもとようこ}にお願いしました。特産地の達人ならではの“コツ”を交えて解説していただき、参加者からは好評^{こうひやう}をいただきました。指導された橋本氏からも地域の製品のPRが出来てうれしかったとお言葉をいただきました。

今後も地域の方々のご協力を得ながら、プログラムの企画を行う予定です。

(主任技師)

サケが自然繁殖している奥能登の川

——産卵をおえたメス親と海へ下る直前の幼魚を確認——

横井 将大

川で見つかる生きものには、川で生まれ、海で成長し、産卵のために再び川に戻るサケやシロウオなどの遡河回遊魚。海で生まれ、川で成長し、産卵のために再び海に戻るウナギやカマキリなどの降河回遊魚。そして、川で生まれ、すぐに海に下り、産卵とは無関係に再び川に戻って生活するアユやヨシノボリ類などの両側回遊魚がいます。今回は、奥能登で初確認となったサケの幼魚の採集記録について紹介します。

サケの調査を行ったのは、輪島市、珠洲市、能登町の18河川で、春と秋に行いました。河川ごとに上流、中流、下流を手ダモ、カク網を使い、石や岩、ヨシの陰を探し、投網で早瀬や淵で採集を行いました。たくさんの川を調査すると、生きものがたくさんいる川や少ない川がありました。川底にゴミやヘドロがたまっている川、河川改修で川底がコンクリートで固められて石や岩がほとんどない川には生きものが少なく、水が透き通った川や魚道が整備され、生きものに優しい河川改修がなされた川には生きものが多く住んでいました。その中でも平成20年3月の春の調

査で、輪島市の町野川、河原田川、八ヶ川、珠洲市の若山川、能登町の松波川でサケの幼魚を採集できました。このうち、河原田川では3月21日に輪島市の大屋小学校の生徒が育てた約200匹の幼魚が放流されていますが、この川の調査は3月12日に行なっているので、採集したものは放流されたものではなく、この川で孵化したものだと思われます。そして平成20年11月の秋の調査では、能登町の九里川尻川で親魚を確認し、12月には珠洲市の竹中川で、産卵を終えて弱っていたメスのサケを採集することができました（もちろん、特別採捕許可を得ています）。

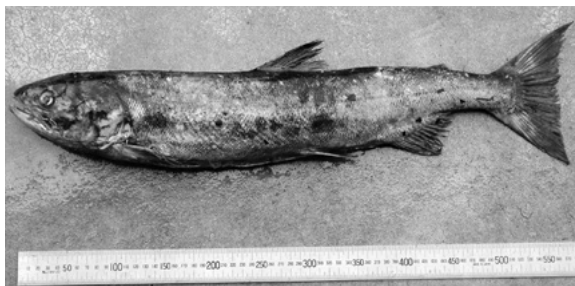
奥能登では、石川県の調査により、輪島市の河原田川、町野川、阿岸川で親魚が確認され、サケが遡上する川とされていました。一方、我々の聞き取り調査により、能登町の九里川尻川、珠洲市の竹中川、そして輪島市の西二又川、仁岸川でもサケが遡上しているとの情報を得ていました。今回、サケの幼魚が採集されたことで奥能登の河川でもサケが産卵に適した場所まで川を上り、産卵していることがわかりました。そして、生み出された卵は孵化し、そして幼魚も生活できることがわかりました。もしかしたら、能登の川で産まれたサケが海へ下り、オホーツク海やベーリング海、アラスカ湾へと約4年の長い長い旅を経て、産まれ育った母川に帰って来て、繁殖をくり返している可能性がとて大きくなりました。

今回の調査により、幼魚や親魚を確認できなかった輪島市の阿岸川と仁岸川、西二又川でも遡上しているなどの目撃情報もあるので、おそらく奥能登の中規模以上の川で、サケが自然繁殖していると思われますので、これからも調査を続けたいと考えています。

そして生きものに優しい護岸・魚道整備、地域住民の河川美化活動の継続により、これからもずっとサケが母川に帰り、自然繁殖を続けてくれることを願っています。（総務課主事）



輪島市の町野川で採捕したサケの幼魚



珠洲市の竹中川で採捕した産卵を終えたサケのメス

海への感謝 in 能登

——海から地球温暖化を探る・そして海をクリーンに——

福島 広行

石川県の奥能登地域は、標高 500m 未満の丘陵地や山地が大半を占めています。また、海岸線は断崖絶壁が続き、海岸線から標高 100m の水平距離は 1km 未満が主体となっています。このため、奥能登全体が里山であり里海でもあるという特色を持っています。能登の人々にとって身近な里海は、四季折々に多彩な恵みをもたらす、雄大な景観は心に安らぎを与えてくれるかけがえない財産です。しかし、経済の進展とともに人間の生活様式が様変わりするに伴い、地球温暖化の波がじわじわと忍びよっているのです。また海では、海洋ゴミが環日本海域のみならず地球規模の大きな課題になるなど、地球環境の急激な悪化が懸念されています。そこで、日本海における魚類相の変遷から見た地球温暖化の兆候に注視し、その防止に向けた意識の高揚を図るとともに、海洋ゴミの現状についての理解と関心を深めていただくことを目的とした「海への感謝 in 能登～海から地球温暖化を探る・そして海をクリーンに～」を 9 月 27 日（土）に開催しました。

まず、第 1 部として京都大学フィールド科学教育研究センター舞鶴水産実験所の准教授である益田玲爾先生を招き、「日本海食う寝る潜る～魚の目から見た地球温暖化～」と題した講演会を開催しました。先生は、平成 12 年から実験所周辺の定点海域で定期的に潜水調査し、魚類相の把握や行動・生態の観察等を行っておられます。今回は、その調査成果から知り得た魚類の行動・生態のほか、地球温暖化の兆候と思われる事例などについてスライドを交えて紹介していただきました。定員を上回る 72 名の参加者からは、「大変興味深く、面白かった」、「もっといろんな話を聞いてみたい」、「参加してよかった」など、多くの好評を寄せていただきました。

昼食の後、第 2 部として磯の観察路周辺の海岸・海底清掃活動を行う「クリーンダイブ＆ビーチ」を開催しました。当センター周辺では、長さ

200m の海岸線に年間 1 トンを超える海洋ゴミが漂着しています。今回は、町内にある石川県立能登北辰高等学校の生徒をはじめ、県内のダイビング愛好者、のどスノーケリング研究会「海もぐら」のメンバーなど 66 名が、スクーバ潜水班とスノーケリング班、陸上班に分かれて回収作業を行い、海洋ゴミへの理解を深めていただきました。当日は、うねりが強く、また前日の雨による透明度の不良も重なり、決してベストコンディションとはいえない状況でした。しかし、参加者からは「海底地形が変化に富んでいて面白かった」、「魚もたくさん見れた」、「また企画して欲しい」など、一様に満足していただけたようでした。肝心の海洋ゴミはというと、重量では車のタイヤが、数量ではゴルフボールが最も多く、全部で約 190kg が回収されました。

当センターでは、これまで単独での事業実施が多かったのですが、今回は様々な機関と連携させていただき実施しました。今後は、こうした“連携”を広め、事業に幅を持たせられればと考えています。（普及課専門員）



講演会の様子



クリーンダイブ＆ビーチの参加者

セ ン タ ー 誌 抄

2008 (平成 20) 年後期 (7 ~ 12 月)

7/1 平成 20 年度日本海北部地区水産教育研究大会 (県立能都北辰高校主管) の講演会講師として坂井恵一普及課長を派遣
7/2 環境省中央審議会の 25 名が視察のため来館
7/12 ヤドカリ学級「ところでづくり！」を開催 25 名参加
7/19-20 スノーケリング指導者研修会を開催 10 名受講、能登消防署による普通救命講習受講、並びに指導方法の実施
7/26 体験スノーケリングを開催 午後 3 名参加
7/27 体験スノーケリングを開催 午前 7 名、午後 3 名参加
7/29-31 わく・ワーク (Work) 体験学習で松波中学校 2 年の土幸真衣さん、南口史織さん、古谷太宏君、能都中学 2 年の鈴ヶ峰貴嗣君の 4 名が職場体験を実施
8/1 県立小松高校理科 46 名が臨海実習を実施
8/2 体験スノーケリングを開催 午前 3 名、午後 5 名参加
金沢サイエンスクラブの生徒 20 名、教諭 14 名が磯観察を実施
8/3 体験スノーケリングを開催 午前 7 名、午後 5 名参加
8/8 金沢大学理学部の 19 名が臨海実習のため来館
8/9 体験スノーケリングを開催 午前 6 名、午後 6 名参加
8/10 体験スノーケリングを開催 午前 12 名、午後 5 名参加
8/11 能登半島里山里海体験実習の 34 名が施設見学のため来館
8/12 能登少年自然の家主催「能登の海・山まるごと自然体験」の参加児童 44 名がマール教育プログラム受講
8/16 体験スノーケリングを開催 午前 10 名、午後 8 名参加
8/17 体験スノーケリングを開催 午前 4 名、午後 18 名参加
8/23 体験スノーケリングは荒天のため中止
8/24 体験スノーケリングは荒天のため中止
8/30 体験スノーケリングを開催 午前 5 名、午後 1 名参加

8/31 体験スノーケリングを開催 午前 4 名、午後 17 名参加
9/13 ヤドカリ学級「魚つりと魚拓づくり！」を開催 29 名参加
9/14-15 里山里海国際交流フォーラム能登エコ・スタジアム (能登の里海エクスカージョン) の参加者 22 名 土器製塩を体験 (P2 参照)
9/24-26 わく・ワーク (Work) 体験学習で小木中学校 2 年の村上大介君、曾良順平君、中町幸司君の 3 名が職場体験を実施
9/20-21 いしかわ自然学校のインストラクター養成課程の受講生 18 名を対象にスノーケリング教室と磯の観察会を開催
9/27 スノーケリング指導者研修会を開催 午前：講演会「日本海 食べる潜る一魚の目から見た地球温暖化」を開催 72 名参加、講師は京都大学フィールド科学教育研究センター準教授の益田玲爾氏。午後：クリーンダイブ&ビーチを開催 66 名参加、スクーバ潜水とスノーケリングによる海中清掃、並びに磯の観察路を含む周辺一帯の海岸清掃を実施 (7P 参照)
10/11 ヤドカリ学級「あぶらめつくり！」を開催 28 名参加
10/26 金沢市で開催された「いしかわり山フェア」に土器製塩の体験プログラムを出展し福島広行専門員と横井将大主事を派遣
10/30 能登の海中林 第 29 号発行
10/30-31 応用生態工学学会第 7 回北陸現地ワークショップの講演会講師として坂井恵一普及課長を派遣、現地見学会の参加者 40 名が施設見学のため来館
11/8 ヤドカリ学級「巣箱づくり！」を開催 4 名参加
11/20 県政出前講座の講師として福島広行専門員を穴水町に派遣
11/21 県政出前講座の講師として東出幸真主任技師を羽咋市に派遣
12/6 ヤドカリ学級「海のリースづくり！」を開催 19 名参加
12/13 ヤドカリ学級「サケのおはなし！」を開催 3 名参加

観 察 路 だ よ り

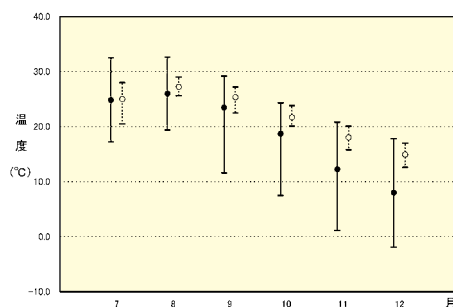
7 月から 12 月にかけての気温を平年値と比較すると、夏が低めで冬が高めとなり、特に 8 月は 0.8℃低く、12 月は 1.4℃も高く推移しており、冷夏暖冬の傾向が見られました。一方、磯の海水温は、7 月に 1.0℃高めとなりましたが、その後はほぼ平年並みで推移しています。

さて、皆さんは平成 16 年 3 月に施行された「ふるさと石川の環境を守り育てる条例」をご存知ですか？

これは、石川の自然と人との共生しつつ、循環を基調とする持続可能な社会づくりを目指すためのもので、複雑化する環境問題に多様な視点で対応するための体制づくりを進めるとともに、県民や事業者、行政、NPO などが協調して取り組むべきことを明確化し、規制が必要なものについては新たなルールづくりを行うための条例です。

この新たなルールの一つとして、私たちの日々の生活に伴う環境への負荷や生活様式の変化に伴う里山・里海の荒廃などによる希少野生動植物の保護を図るため、「石川県指定希少野生動植物種」15 種を指定し、捕獲や採取、殺傷、損傷する行為を原則禁止しています。また、これに違反して捕獲等された個体の所持・譲渡・譲受も禁止されています。

現在、海産動植物で指定された種はありませんが、主に海岸等で見られる陸産動植物で指定された種がありますので、注意が必要です。詳しくは、石川県のホームページをご確認下さい。(H.F)



2008 年 7 月から 12 月の気温と水温の月変化

気温：午前 9 時に観測した月別平均値 (●)

実線は月別の最高・最低気温の範囲を示す

水温：午前 9 時に観測した月別平均値 (○)

破線は月別の最高・最低水温の範囲を示す

のと海洋ふれあいセンターだより「能登の海中林」
通巻第 30 号 平成 21 年 3 月 25 日 発行
編集発行 のと海洋ふれあいセンター
住所 石川県鳳珠郡能登町字越坂 3-47 (〒927-0552)
TEL 0768 (74) 1919 (代): FAX 0768 (74) 1920
URL: <http://www.pref.ishikawa.jp/nmc/index.html>
E-mail: nmci@pref.ishikawa.lg.jp

— のと海洋ふれあいセンター —

設 置 者：石川県 (環境部自然保護課) 管理運営：(財) 石川県県民ふれあい公社
入 場 料：個人は高校生以上 200 円、団体 (20 名以上) 160 円、中学生以下は無料
開 館 時 間：午前 9 時～午後 5 時 (但し、入館は午後 4 時 30 分まで)
休 館 日：毎週月曜日 (国民の祝日を除く) と年末年始 (12 月 29 日～1 月 3 日)